程度副詞に関する中日対照研究

（要旨）

広島大学大学院文学研究科

博士課程後期人文学専攻

学生番号：D144901

氏　　名：劉　　傑

本研究は、意味的側面と統語的側面から日本語と中国語の程度副詞の特徴を究明しようとしたものである。本論は以下の 7 章から構成されており、程度副詞自体の語彙的意味、否定・願望のモダリティ表現と統語構造を明らかにすることにより、程度副詞が文中で果たす機能を明確にすることを目的としている。

第一章　序論
第二章　程度副詞の行為量規定に関する中日対照研究
第三章　比較専用の程度副詞に関する中日対照研究
第四章　程度小の程度副詞の評価性に関する中日対照研究
第五章　程度副詞と否定形式の統語構造に関する中日対照研究
第六章　程度副詞と願望表現の共起に関する中日対照研究
第七章　終章

第一章では、日本語の程度副詞の定義と中国語の程度副詞の定義を提示し、両者の文法的役割が同じであることを確認したうえで、先行研究を整理し、本研究の位置づけを述べる。

第二章では、日本語の量的程度副詞が行為動詞もしくは存在動詞を修飾する際の意味を考察し、程度副詞の語彙的意味による共起制限を指摘する。そのうえで、中国語の程度副詞と対照し、日本語と中国語の共通点・相違点を述べ、さらに中国語の“稍微”類の程度副詞には日本語の程度副詞に見られる共起制限がない理由を明らかにする。

第三章では、日本語の「もっと」と中国語の“更”を中心に、比較専用の程度副詞を考察する。まず、中国語の程度副詞“更”の意味機能を分析するために、同じく比較専用の程度副詞“还”と比較した。その結果、“更”は比較対象の程度のほうがより大きいということを表すときに使われる程度副詞であるため、「比較対象の程度が比較基準の上である」ということを判断できないもしくは容易に推測できない場合には“更”を用いることができない、ということが分かった。次に、“更”のこの意味機能を踏まえて、日本語の「もっと」と中国語の“更”の相違点を、(A) 比較基準の程度の位置づけ、(B) 比較対象と比較基準の程度の大小関係に関する推測の可否、(C) 比較基準が明示されないことによる相違という三点から分析を行う。

第四章では、程度小の程度副詞の評価性について、日本語の「多少」と中国語の“多少”を例に論じる。ここでいう評価性とは、プラス評価の意味を表すか、マイナス評価の意味を表すかということを指す。まず、「多少（日／中)」が比較構文と非比較構文に使われる際の評価性を考察し、そののち程度性と注目点が評価性に与える影響を検討した。結論は、次の三点にまとめることができる。(1) 比較基準が実際存在しない場合は、程度が小さいことを表す「多少(日/中)」は、物事の性質・状態の程度を限定するとき、表現主体の期待値という高い程度に達していないため、プラス評価の表現と共起しにくい。しかし、比較基準が現れる場合は、「多少（日/中)」は、比較対象は期待値に及ばないが、比較基準の程度の高さより上であるということがあり得るため、プラス評価を表すことが可能になる。(2)

程度副詞「多少（日）」は、比較構文に用いられる場合、プラス評価の意味もマイナス評価の意味も表すことができる。それに対して、“多少（中）”は、比較構文に用いられる場合、「程度が小さいが、比較対象と比較基準の程度の間に有意差があり、比較基準より比較対象のほうがましだ」という意味でのプラス評価しか表せない。(3) 程度副詞“多少（中）”は譲歩節と逆接の従属節に現れることはほとんど不可能であるのに対して、「多少（日）」は、それらの従属節に現れることが多い。これは、「多少（日）」が、「程度が小さい」という側面に注目することが多いということを意味する。程度が小さいという程度性は、プラス評価かマイナス評価かの評価性を逆転させることがある。

第五章では、程度副詞と否定形式の統語構造について日本語と中国語の共通点・相違点を考察する。ここでいう否定形式とは、日本語では「ない」と「不」、中国語では“不”を代表とするものである。否定のスコープとの関わりから、程度副詞が否定形式と主節で共起するまたは共起しない理由を明らかにした。結論としては、中国語の程度副詞でも日本語の程度副詞でも、否定のスコープ内に入らない場合は主節で否定形式と共起し、否定表現が表す事態の程度を規定することができる。日本語の程度副詞が主節で否定辞「ない」と共起しにくいのは、否定辞の否定スコープ内に入るためである。日本語では、否定辞「ない」は前方否定であり、述語部を修飾する程度副詞もその否定のスコープ内に入る。日本語の否定接頭辞「不」は後方否定であるため、程度副詞はその否定のスコープ内に入らない。そのため、「ない」と「不」は同じく否定を表すが、程度副詞と共起する際の振るまいが異なる。また、中国語の否定辞“不”は、文を否定することができるという点で日本語の「ない」と共通するが、後方否定という点で異なる。中国語の否定辞“不”は、後方否定であるため、その前方にある程度副詞は否定のスコープに入らない。その結果、中国語の程度副詞は主節で否定形式と共起することができ、日本語の程度副詞のような共起制限がない。

第六章では、程度副詞と願望表現の統語構造について考察する。まず日本語の程度副詞と願望表現「～たい」の統語構造を明らかにし、そのうえで中国語の場合と比較した。日本語では、程度副詞は常に願望表現「～たい」の前に位置するが、程度副詞が「たい」までかかり願望の程度を規定するという構造と、「たい」までかからず動詞が表す程度・量を規定するという構造の、二つのパターンが存在する。どちらの構造を取るかは、程度副詞の語彙的意味および比較基準が明示されているか否かによる。中国語では、程度副詞が願望表現“想”を修飾するかどうかは語順で決まる。この点では日本語と異なるが、“稍微”類の程度副詞はその語彙的意味により、願望の程度を修飾しにくいという点では日本語の「少し」類・「もっと」類と共通している。

第七章では、本研究の議論をまとめ、今後解決すべき課題に関して現時点での展望を述べる。